

第3回女子美ベルリン賞報告書

加賀田 恭子

プロフィール

1993 年3月	女子美術短期大学 グラフィックデザイン教室 卒業
1994 年3月	女子美術短期大学 専攻科 宣伝計画専攻 修了
1994 年4月～	デザイナー／アーティストとして日本、シンガポールで活動
2003 年3月～	フリーランスとして、横浜とベルリンで活動

1993 年3月	女子美術短期大学 卒業制作賞
2019 年9月	大村文子基金 女子美ベルリン賞受賞
2020 年9月	大村文子基金 女子美制作奨励賞受賞

2002 年9月	「インフィニティ・ウェア」 銀座ギャラリーハウス(東京・日本)
2003 年2月	「Designers Exhibition」 ソウルデザインセンター(ソウル・韓国)
2003 年9月	「インフィニティ・ウェア-2」 The Economist Gallery(ロンドン・イギリス)
2004 年4月	「ディスプレイオーナメントボディ・es」 青山スパイラルギャラリー(東京・日本)
2006 年10月	「ペーパー・シャツ・ショウ」 三溪園 重要文化財旧燈明寺(神奈川・日本)
2007 年10月	オペラ「こうもり」 福島県文化センター(福島・日本)
2022 年8月	「子どもによるオペラ衣装デザイン」 「The European Cultural Centre (ECC), Palazzo Bembo Venezia」(ベニス・イタリア)
2024 年7月	「子どもによるオペラ衣装デザイン」 ZK/U (Zentrum für Kunst und Urbanistik) (ベルリン・ドイツ)

ベルリン滞在の動機・目的

「子どもによるオペラ衣装デザイン 発表と経過観察／調査・分析」は、2019年からスタートしました。子どもがデザインしたオペラ衣装を、各分野のプロの専門家が具現化し、オペラ歌手が着用してコンサートを行います。子ども自身が、「アートで夢が叶うこと」「夢を叶える大人がいること」を体感し、いずれ「夢を叶える大人」となり、このリレーが続くことを願っています。

創作活動を通じて「精神的な支え」「社会との幅広い接触」「ポジティブで健全な思考」を得て、人生のあらゆる場面で役立たせることを知り、子どもたちに未来への自信を持たせることが、このプロジェクトを始めた動機となっています。

さらに、私の作品には三つの目的があります。

まず、「アートと社会をつなぐ」です。社会のコミュニティと連携し、地域のアーティストや住民と共同でプロジェクトを展開します。彼らのストーリーや視点を広く伝えることで、異なるバックグラウンドを持つ人々の相互理解を促進します。

次に、「アートへの関心を多世代に広げる」です。さまざまな年齢層が参加できるワークショップやイベントを企画します。子どもから高齢者までが一緒にアートを制作し、意見を交換する場を設けることで、世代を超えた対話を生み出します。地域の人々が気軽に参加できるアート活動を通じて、アートの楽しさを広めていきます。

最後に、「美術教育の重要性を確認する」です。アートが軽視されがちな現状を踏まえ、子どもたちに創造性を育む機会を提供します。ベルリンの多様な文化を反映したカリキュラムを導入し、子どもたちが自分のアイデンティティを表現できる場を作ることで、アート教育の重要性を再認識させます。

このように、ベルリンの多様性を生かしながら、アートを通じて社会のつながりを深めます。ベルリンは街の至る所にアートが溢れ、独特の雰囲気が漂うこの場所は、私の創作活動にとって刺激的な環境です。

女子美ベルリン賞を受賞できたことで、2024年7月から、ベルリン・ミッテ地区にあるアーティストインレジデンス「ZK/U」にて研究と制作を行う機会をいただきました。「ZK/U」は「Zentrum für Kunst und Urbanistik(都市と芸術のためのセンター)」という名称が示す通り、地域や社会に関連するプロジェクトを重視しています。

ここでの経験を通じて、私はアートを通じて社会とつながり、多様な視点を持つ人々と交流し、さらに自らの作品を深めていくことを目指しています。

制作・研究活動

レジデンス滞在まで 2020年7月から9月に派遣される予定だったが、コロナパンデミックの影響でレジデンス滞在が延期となり、ドイツへの入国も制限された。しかし、作品の準備を進めていたことや、家族でこの時期にドイツへ移住する計画を立てていたため、「待つなら日本ではなくドイツで」と決意し、2020年10月に渡航制限が一時緩和されたタイミングで渡航に踏み切った。

ドイツ入国後、ロックダウンが始まり、子どもの学校は休校、美術館やギャラリーも閉鎖された。オンラインでドイツ語を学ぶなど、できることから始めるよう心がけたが、この状態は約1年半続いた。

徐々に日常が戻り始め、ワクチン証明があれば美術館やギャラリーを訪問できるようになった。当時のベルリン賞でのレジデンス滞在先は「クンストラウム・クロイツベルク／ベタニエン」で、ベルリンにある30以上の公営ギャラリーの一つだった。参考のためにこれらの公営ギャラリーをすべて訪れ、作品や施設の特徴をまとめて、自分なりの方向を探った。

移住から1年半が過ぎた2022年の夏、イタリア・ヴェネツィアで女子美パリ・ミラノ・ベルリン賞の受賞者によるグループ展に参加する機会を得た。女子美の先生方や学生たちとも顔を合わせ、ようやく作品を発表する場が訪れた。

その後、延期されていたベルリンでのレジデンス滞在が決まり、2024年7月から9月にかけて、ベルリン・ミッテ地区モアビットのアーティスト・イン・レジデンス「ZK/U」に入居する運びとなった。この決定から入居までには約1年半の準備期間があった。

アーティストの活動スタイルによって異なるが、自分の場合、レジデンス滞在中は制作よりも「作品発表の場」として活用し、多くの人々とコミュニケーションを取りながら作品を発展させ、次の発表の機会を模索することを重視していた。そのため、入居時点でほぼ完成した状態の作品が必要だった。

入居日が決まったことで、新作2点の準備を一気に進めた。パリではピアニスト、ベルリンではオペラ歌手、カメラチーム、衣装スタッフを手配し、作品のメインとなる衣装9点や動画は入居前に仕上げることができた。入居後、18日後に予定されていたオープンハウスでの初公開のため、集中してセットアップを進めなければと思いながら、2024年7月1日、レジデンス滞在の初日を迎えた。

制作・研究活動

●2024年7月入居～

ZK/Uでのレジデンス生活がいよいよスタートした。担当者より、鍵の受け取り時間を知らせるメールを受ける。偶然にも自宅から徒歩7分という近さがあるがありがたい。

初日は天気が不安定で、突然の大雨と快晴を何度も繰り返していた。紙を素材にした作品が多



いため雨が心配だったが、幸いにも移動中に降られることはなかった。手運びで10往復以上かけて搬入したが、これでようやくレジデンス生活が始まったという実感が湧いた。

程なくしてZK/Uの入居説明会があり、同時期に滞在を始めたアーティストたちと顔を合わせた。ポーランド出身のジョアンナ、フランス出身のアレクサンドルらと英語を交えて自己紹介。ZK/Uが西ベルリンの旧駅跡地に建つ歴史的な施設であることを

知り、その背景が建物内の細部に色濃く残っていることが印象的だった。ジョアンナは強制収容所をテーマにしたドキュメンタリー作家で、この場所を通じた彼女の視点には特に興味を惹かれた。

生活が徐々に落ち着き始めてくると、ZK/Uのキッチンを実格的に使い始めた。調理器具の場所を探しながらの作業だったが、これまでの海外経験のおかげで特に困ることはなかった。日中も慌ただしく、デザインの仕事も並行して進めなければならないが、学生の頃のように、自由に時間を使える環境はありがたい。

制作では、壁に作品の一部であるフレームを固定する方法を試行錯誤した。小麦粉と水で作った糊を試したところ、強度がありながら水で簡単に剥がせることがわかったため、この方法に決めた。



オープンスタジオより前に、市議会議員たちのスタジオ見学というイベントもあった。この施設の助成金のからみのよう。よってオープンハウスより前倒しの途中経過の段階で、それなりの整えて披露することにした。

7月は日も長くテラスでの食事が心地よく、レジデンス仲間と多国籍料理を楽しむ機会が多くあった。ピンク色のポーランドのスープや、ブラ

制作・研究活動

ジルの黄色いスープなど、新しい味わいに刺激を受けた。そのほか、ウクライナのボルシチやレバノンの肉詰めパプリカなども、手間をかけた凝った料理のクオリティに驚く。自分の時はどうか、とややプレッシャーになってしまった。結果、寿司をつくり、喜んでもらえたようでほっとした。



ブラジルの黄色いスープ

ZK/U ではこの施設のキュレーター、外部のディレクターなどのコンサルを受ける機会が多くある。私自身、ベルリンの街を舞台にしたアートの提案を受け、新たなプロジェクトを見出すきっかけを得た。

ZK/U の敷地内は公園としても使われており、地域の家族連れが訪れる姿をよく見かける。特に夜9時を過ぎても明るいベルリンの夏では、子どもたちの遊ぶ声がスタジオまで響くこともあった。

オープンハウスの準備は大詰めを迎え、入居前は紙で制作した床に羽や花を散らす演出を考えていたものの、時間が足りず断念。しかし、展示空間の装飾が十分に仕上がったため、結果このプランに変更した。以前パリやベネツィアで観た美術館や博物館の展示を思い出しながら、作品をどう見せるかに工夫を凝らした。

オープンハウス前日には終日作業に追われながらも、中央のテーブル装飾の方向性がようやく定まり、準備に目処がついた。途中経過でもよいのだが、私はある程度完成したものを見せたかったため、ぎりぎりまで作り込んだ。

ZK/U でのオープンハウスは2ヶ月に一回。次回の9月では、さらに違った見せ方ができるような新しい演出を考えたいと思う。

▼初めてのオープンハウスで完成した作品



オープンハウスの当日エントランス



制作・研究活動

●2024年7月・1回目オープンハウス～8月

とうとうオープンハウスの日がやってきた。5年かけて制作してきた作品がついに日の目を見る。事前にキッチンに集合してレジデンスツアーが開催。夕食としてピザのケータリングまで準備され、レジデンスが創作に集中できる環境が本当にありがたい。19時に会場がオープンすると、知人は



ゲストで賑わうスタジオ内

もちろん、多くのゲストが来てくれた。

発表するまでは、私の作品が「社会問題を強く提起する作品が多い ZK/U に合うのだろうか？」と少し気になっていたが、結果として自分らしく創作を爆発させたことがよい評価につながったと思う。問題提起型のレジデンスも多くの友人を連れてきてくれ、「影響を受けた」と言ってくれた。

彼のスタジオにも案内され、ユニークな「トイレの落書き」やアニメーション作品を見せてもらっ

た。また彼は素晴らしい料理人でもあり、何度かレバノン料理をご馳走になった。それまで食べたことがない料理だったけれど、その温かい人柄が料理にも表れているようだった。

このように、オープンハウスをきっかけに、他のレジデンスメンバーと一気に距離が縮まった。言葉の壁はあったものの、アートを介した交流のおかげで、夜遅くまでテラスで飲んで語り合ったり、共通の喜びを感じることができた。

オープンハウス終了後の後日、近所の「Spoiler」というユニークな会場で行われていた展覧会「AIRBAG」や、ベルリンの2つの美大のオープンキャンパスを訪れた。卒業制作展のような展示もあり、ドイツらしい政治や身体性をテーマにした作品が多く、新鮮な刺激を受けた。写真や動画で



テラスでレジデンスとディナー

記録しながら、女子美とつながる何かができればと思い、大学と相談したところ、オンライン講義を共創デザイン学科と行うことができた。

日々の生活では、レジデンスの仲間と一緒にフードシェアや自炊を楽しんだり、月曜ディナーで各国の料理を味わったりと、毎日が異文化交流という感じ。英語で自分の作品を発信しやすいため、Instagramも利用するようになった。



ベルリンの美大 UDK (Universität der Künste Berlin) のオープンキャンパス

制作・研究活動

とある日のキュレーターとのコンサルでは、自分にとっては挑戦的なアイデアを提案され、「これを本当にやるべきか」と葛藤もあった。しかし、ベルリンの自由な空気に背中を押され、少しずつ自分の枠を広げることも意識した。コンフォートゾーンにとどまるな、というのはドイツ語学習でも言われた。



挑戦したキュレーター提案のプロジェクト
「Leopoldplatz Amadeus Mozart」

月末になると、レジデンスの数人が退出していった。彼らには私の作品を使ったフレームや和紙の小箱をプレゼントしている。レジデンスの1人からドロ잉をいただき、私の宝物になった。

レジデンス滞在後半の活動として、各方面へのアプローチも始動した。前々から、自分の作品を公共の場に展示したいと思っていた。図書館、市役所のロビー、劇場のホワイエ。そんな場所に、自分の表現が溶け込む姿を想像していた。ベルリンで

のオープンハウスでは、完成した作品だけでなく、鑑賞しているゲストの写真も撮れた。これを材料にして、「公共の場で展示したい」とあらゆる方面にメールを送ることにした。絞ったターゲットは3つ。

- * ベルリン全土の公共図書館
- * ベルリン全土の市役所
- * ドイツ全土のオペラ劇場、コンサートホール

結果、メールを600通送信した。ベルリンには12の行政区があり、その中に約80の公共図書館がある。1区に6館の計算で、それぞれの館が広々としているうえ、ワークショップや音楽専門のプログラム、子供向け劇場、素敵なカフェなど、特色も多い。かつて住んでいた横浜市を思い出すと、18区に18館。つまり1区1館だ。ベルリンの人口は370万人、横浜は380人だから規模は近いけれど、文化インフラの充実度は間違いだと感じる。



プレゼントしている作品フレーム



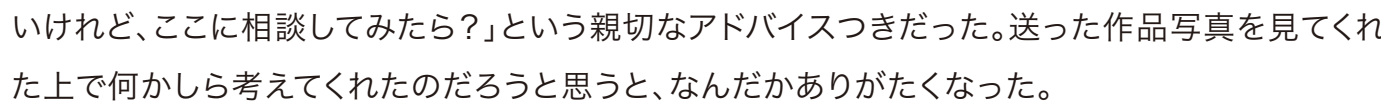
自分のアプローチ方法をレジデンスに紹介

ど、文化インフラの充実度は間違いだと感じる。

メールの宛先を整理すると、図書館が80、市役所が12、残りの500がドイツ全土の劇場やホールだ。小さな教会での音楽イベント会場も含めた結果の数だけど、それでもこの文化層の厚さに驚かされた。

そして、2024年というこの時代。メールという便利なツールがあるのはありがたい。20年

そして肝心の返事については、レジミンスの皆



40通の返事には、すべて適した内容で返信を送った。その際、9月中旬に控えていたオープンハウスの案内も添えた。そして実際に、図書館の職員の方々とその機会に直接会うことができた。

返信メールは多く受け取った。でも、それでも、4



◀ 600件の送付先をリスト化したエクセルの一部

制作・研究活動

●2024年9月・2回目オープンハウス～滞在延長～11月・3回目オープンハウス～レジデンス退去

9月に入ってベルリンの気温は8度まで下がる日もあった。12日より4日間連続のオープンハウスが行われ、7月時より作品を追加した。備え付けのグリーンロッカーと、バスルームの窓を利用し、「既存オブジェクトを自分の作品に巻き込んで利用する」という私のスタイルで表現することができた。

2回目オープンハウス初日に 予告なしデモが発生



オープンハウス初日は、ゲストであった政治家のスピーチ中にデモが発生。パレスチナ国旗を掲げる集団がスピーチを大声でかき消し、爆竹の音も響き、一時騒然となった。たどり着いた警察は強制的な排除をせず、静かに収束を待つ姿勢だったのが印象的だった。レジデンスの仲間と「これは乗取りだ」と語ったりしたけれど、ベルリンという街の多様性と混沌を改めて感じた出来事でもあった。

9月後半には、女子美の共創デザイン学科とのオンライン講義を行った。テーマは「共創力」「ライフマネジメント」「産学連携」の三つ。特に「共創」の大きな要素である「お互いに受け入れる」という点については、ここZK/Uでの経験が強く影響した内容となった。

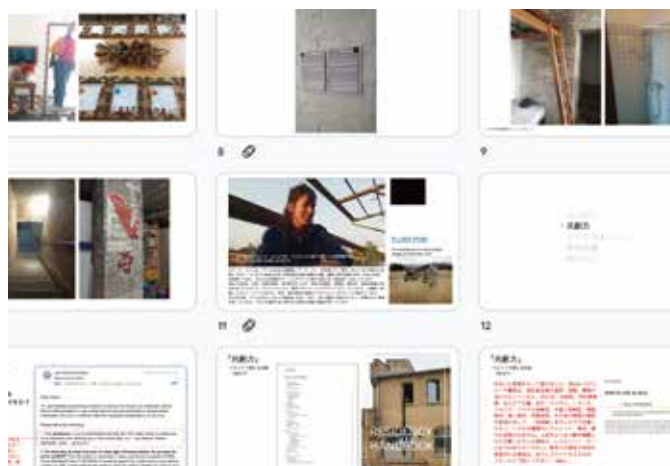
講義では、具体例としてこんな話をした。ZK/Uのディレクターから最初に送られてきたメールに、「あなたの代名詞はと呼ばばいいですか？」という質問があった。この一文に、正直驚いた。聞き慣れない問いかけだったからだ。

調べてみると、英語では代名詞の使い方に深い配慮が求められていることがわかった。たとえば会話の中で名前を使うのは最初だけで、その後は“I think she is right.”や“I agree with him.”というように、代名詞でその人を指すのが普通だ。た



だし、見た目で判断して「he」「she」を選ぶのは、もはやナンセンスとされている。特に、トランスジェンダーやノンバイナリーの人が多く存在するアーティストの世界では、それは重要なマナーだ。外見や勝手な思い込みで他者を性別で区切るのは避けるべき、という価値観が広がっている。

入居前に送られてきたレジデンスのハンドブックにも同じような姿勢が現れていた。生活に関す



共創デザイン学科とのオンライン講義でのPPT

制作・研究活動

る基本的な情報が記載されたハンドブックだが、その中で「他者の立場を尊重する」という理念が、しつこいくらい強調されていた。ベルリンでは、イベントやワークショップでも似たようなポリシーに触れることが多い。性別に限らず、相手の背景や状況を尊重し、安易にラベルを貼らない姿勢が徹



底されているのだ。

とはいえ、実際にそれが社会全体でどれほど守られているかについては、まだよくわからない。自分はドイツに来て日が浅く、幸運にも嫌な経験をしたことはない。しかし、友人の中には、そうしたルールが無視された場面を経験した人もいる。

ただ一つ確かなのは、こうしてポリシーを明確

大学生でもあるレジデンスをオンライン講義で紹介

とだ。声高に掲げることが、文化や社会の変化を促す一歩になる。ベルリンでの日々を通じて、このような「共創」のあり方を強く感じている。講義でも、その一端を学生たちに共有できたなら嬉しい。

ベルリン賞での滞在は9月末までだったが、私はあえて自費で2ヶ月の延長を決めた。結局、滞在はトータルで5ヶ月。一年の半分近くにもなる。

11月に行われた3回目、最後のオープンハウスでは、この夏に子どもたちが描いた「パパゲーノ衣装デザイン画」を最終プロジェクトとして公開した。この作品が、この滞在の集大成となった。

アーティストインレジデンスの5ヶ月間、私は近

所に住む家族と完全に別居していた。家事全般は主人と息子がしっかりこなしているようで、自分がやなければ、というような力みもお陰でなくなった。自宅に戻ってもこのままお互いに自分のこ



ZK/U のカメラマンによる撮影



ZK/U のカメラマンによる制作風景

とをする生活を続けるつもりだ。家族や子育てのせいで創作できないことを、もはや言い訳にはできない。

ZK/U で過ごした時間は、アーティスト同士が敬意を持ち、心地よい共同生活で生まれる創作の上昇気流のようなものに満ちていた。これは、普通の生活の中ではなかなか得られないと思う。最近になってようやく得たこの感覚を、レジデンスを退出した後もどのように保ち続けるかが、今後の課題になりそうだ。

おわりに

滞在前、私は多様性や他者を受け入れることの重要性について、漠然とした理解しか持っていませんでした。しかし、5ヶ月間の滞在を通じて、特に ZK/U での経験が私の考え方を大きく変えました。

「多様性を認める」ということは、単なる理念ではなく、実際に行動に移すべき重要な価値観であると感じるようになりました。



5ヶ月という長期滞在によって、さまざまなアーティストや関係者と接し、彼らの生活を知る中で、彼らの行動に影響されながらその価値を実感しました。特に印象に残ったのは、ZK/U からの「あなたの代名詞はと呼ばばいいですか?」という問いかけです。このような配慮は、私が以前には考えもしなかった視点を提供してくれました。性別や背景に関係なく、他者を尊重する姿勢が強く求められていることを実感し、これは今後の創作活動においても大切にしていけるべき前提となるでしょう。

オープンハウス2回目に発生したデモ事件のような問題にも、無関心ではいられなくなりました。日本は島国であるため、自分とは異なるものを受け入れる許容度が低いかもしれませんが、陸続きである欧州では日々、許容とそれに伴う問題が目の前にあると感じました。

このような課題に対して、アートを通じて何ができるかを考え、必ず何かできると今は強く思い、レジデンスの滞在をまもなく終えます。この機会をいただいた100周年記念大村文子基金および、大村智名誉理事長に心から感謝いたします。

▼最後のオープンハウスでの展示

